

第七話 「刷れるかどうか心配です。」

お店から自転車で10分弱。今回、「やがて森になる」の印刷をお願いする「九波堂」さんのアトリエは、昔ながらの国分寺の家並みにあります。

酒井草平さん、三代目。祖父、勝郎さんが退職後「趣味で」活版印刷に取り組んだ名残として、その印刷室には、九ポイントの活字が並ぶ棚、活版校正機、インクのおい。中でも活版校正機（メーカーが清水製作という会社であったため、愛称は「清水サン」）は20年弱の故障期間を経て、今年5月に現役復帰を果たしたばかり。縁あって酒井さんをお訪ねすることになったのは、ちょうどその頃でした。

名刺やポストカードなら刷れる。ただ本は…。見せていただいた活版印刷の文字の存在感に撃たれながら印刷のご相談を試みるものの、酒井さんからはすげないお返事。ただ、勝手に縁を感じ「九波堂さんにお願いたい！」と決めてかかった著者と自分。あれこれ策を講じてはぶつけ、「活版は難しいが、凸版なら…」と道を見出します。

原稿を凸版に製版し、それを校正機で刷る。前代未聞の印刷方法です。

（影山知明）